

## 廣池千九郎と天理教本島支教会（二）

立木 教夫

### 目次

- 一 はじめに——本島支教会滞在の意義
- 二 モラルサイエンス研究の進展
- 三 本島支教会との出会い〔以上、56号に収録〕
- 四 本島支教会滞在の時期
- 五 大正八年春の滞在
- 六 大正八年夏から秋の滞在

キーワード…モラルサイエンス研究、天理教教理研究、天理教本島支教会、講習会、静養、片山好造会長

### 四 本島支教会滞在の時期

大正八年二月から同十三年一月までの六年間、廣池は九回、天理教本島支教会に滞在している。ただし、

大正八年の夏から秋までの滞在と、大正九年の春の滞在は、それぞれ一回と数えることにした。滞在期間を表にすると、次のようになる。

〈年〉	〈月日〉	〈滞在日数〉	〈出典〉
大正 八年	二月二十七日から三月八日(？)	一〇日間	『日記2』一六五―一八ページ
	七月一日から八月一日	二五日間	『日記2』二〇二―二〇六ページ
大正 九年	八月三〇日から一〇月一九日	五一日間	『日記2』二〇八―二四ページ
	三月八日以降(？)から二四日	一七日間	『日記2』二三二―二二ページ
大正一〇年	七月一日から九月八日	七〇日間	『日記2』二六〇―二五ページ
	七月一四日から二三日	一〇日間	『日記2』二八八―二八七ページ
大正一一年	二月六日から三月二日	四五日間	『日記3』五一―一〇ページ
	二月五日から三月二日	四九日間	『日記3』四六―四五ページ
大正一二年	二月五日から三月二日	四九日間	『日記3』四六―四五ページ
	一月二七日から二月一日	六日間	『日記3』一〇〇―一〇一ページ

## 五 大正八年春の滞在

本島における最初の滞在は、大正八年二月二十七日から三月八日(？)までの十日間程度であった。この

間の生活や静養の様子については不明だが、講習会については筆記録が残されている。

### 1 講習会

廣池は、三月一日から四日にかけて、本島部下の布教師を対象に講習会を開いた。『廣池千九郎日記』に「講習会。満、韓、<sup>ウラジオストク</sup>浦、<sup>ウラジオストク</sup>塩、中国布教者約五十人<sup>35</sup>」と記されているように、満州、韓半島、極東ソ連、中国で布教活動を展開していた天理教の布教師が、本島に集合して、廣池の講義を受けたのである。

本島支教会の岩橋健太郎氏は、講義の様子を、「ここに集まります人が多いので、このところ(祭棚)の板の間に……お座りになられてのお話して、……布団に包まれたダルマのようで、布団の中にカイロを入れて、布団から頭の出ているのです。お話しは、まことに力の入ったお声は、隔々まで通りました」と回顧し、「話は学問的な話であったが、これは天理教の教理を学問的に説明するのである。……天理教の教理を最高道徳的に見るとかくかくであるというような説き方である。……その説き方は天理教一辺倒ではない。最高道徳でも行けるといふ説き方である」と述べている<sup>36</sup>。

### (1) 筆記録

このときの講習会の記録を探してみたところ、遺稿整理の段階で、大正八年推定とされた本島支教会の講演速記録全四冊が見つかった。第二冊目と第四冊目は、それぞれ「岡の成立」<sup>37</sup>および「最大の道徳は最大の幸福を生む」と、仮題が付され、すでに解説も行われていた。そこで、本文中に、大正八年の春に滞在したときの講習会の記録か、それとも夏から秋に滞在したときの講習会の記録かを見極めるための手が

りがないかどうか、探ってみることにした。

速記録の第二冊目には、「大阪で二十日間も講演を遣りまして」という記述がある。廣池が、本島に来る直前の時期に限定して、大阪で講演会が行われた時期を調べてみたところ、大正八年以外にはないこと、また、大正八年には、二回とも、直前に大阪で講習会が行われていることがわかった。

春の本島滞在直前に行われた大阪の講演会は、一月十一日から二十四日までの十四日間、そして、天理教本部に五日間戻ってから、再び、一月二十九日から二月四日まで七日間、講演を行っており、合計すると二十一日間となり、「二十日間」とほぼ一致する。また、夏から秋にかけての本島滞在直前の大阪での講演会は、六月十七日から七月十八日までの三十二日間と「二十日間」よりも十二日も長い。よって、二冊目の速記録は大正八年の春のものと推定できる。

また、第四冊目では、「丁度県全体の御方が集まって居る。県庁の地方課の方から御依頼でありましたが、本日は献身的であります。熱もありますので……」と述べていること、「子供の親に、先生方の方で」「校長さん方の力で話して貰いたい」と教育者に語りかけている場面が数箇所あること、さらにまた、四国四県のうち「香川県」の県名のみが数箇所言及されていることを踏まえるなら、この速記録は、本島での講習会の記録ではなく、本島滞在の直後の大正八年三月八日・九日に、高松市の香川県公会堂で行われた「香川県地方課、地方改良講演」の記録であろうと思われる。この「地方改良講演」は、「香川県内務部長」の名で、「各郡市長宛」に、「今回本県において、廣池法学博士を聘し、左記の通り講演会開催候条、官公吏、学校教員、各種名譽職員、神職、僧侶、在郷軍人、青年団員その他一般有志出席聴講候よう御配慮相成りたく候」と通達されたものであり、内容的に適合している。<sup>38</sup> 本島滞在直後の講演会であるから、本島関係者も参

加し、速記録を残したのではないだろうか。

ここではこれらの速記録を大正八年の春のものにとらえておくことにする。

これらの速記録により、当時、廣池が講演会や講習会で取り上げていた内容の一端を知ることができるので、ここに要約しておくことにしたい（小見出しは、筆者がつけたものである）。

## (2) 「閥の成立」

「閥」の研究に関しては、この講習会から一ヵ月近く後の四月二十八日の「日記」に、「年内にモラルサイエンスの内より、閥の御教理を作りて、一月頃までに御本部に献上<sup>39</sup>」とある。本島での講習会では、それ以前から手がけていた「閥」の研究の成果を踏まえた講義が行われたのであろう。モラルサイエンス研究の中から「御教理を作「る」」という記述から、現代の諸学問の成果を用いて、教理の学問的研究が行われていたことがわかる。

講義は、「閥とは」からはじまり、「門閥」を説明し、次に「老人閥」を詳しく説明し、経験、知識と習慣、学問と倫理・道德の関係を解き明かして文明の成立を論じた後、「閥を否定する立場」の民本主義と社会主義を取り上げて注意を促し、最後に、「正義の議論」に及び、形式的平等に対する比例的平均と、権利の基礎としての義務の重要性を論じて結びとしている。

## 「閥の成立」

閥とは

閥には、「門閥、学閥、藩閥、財閥、党閥」などがあるが、「功勞を積んだものを閥と云う」と定義し、まず「門閥」を取り上げる。

## 門閥

「門閥」とは、「祖先が国家の為、社会の為」「功勞を積んだ其の子孫」であるとして、具体例を示し、「閥族など非常に悪い者が寄って居るように思うが決してそうではない」と一般の見方を覆す。廣池は、閥の背後にある、祖先の道德的努力を尊重する觀念の重要性を説き、それが失われると「国家は亡び」としましう、と警告している。

## 老人閥

次に、「天然自然の閥」というものがあるとして、「老人閥」を取り上げる。老人尊敬と親孝行の起源は、「親を山に捨て海に流して居った」のが、「人知発達して老人を尊敬しなければ、吾々の幸福を得ることが出来ない」と云うことが自覚できて、親孝行と云うことが起こったのであ「る」とし、その理由は、「知識、道德の本は老人の頭にある」とも、「経験は知識道德である」とも指摘し、「人類の今日の進歩発達の幸福と云うことは、老人に依って形造られたと云うことが社会的学問に基づいて証明せられて来た」として、「社会学、人類学、法理学」的研究に言及している。

「人類の経験」を「二つ」に分け、「一つは知識、一つは習慣」としている。経験は知識であり、その集積が学問であって、それは教育を通じて伝達される。また、ドイツの言語学的研究の成果を引き、習慣という

語から「エトス」が生まれ、エトスという語から「エシックス」、つまり倫理と言う語が生まれたこと、また、習慣を意味する「モーリス」から、「モラルリチー」、つまり道德という語が生まれたと説明している。そして、「知識」の方が「学校教育、科学、哲学」となり、「習慣」の方が、「倫理、道德、……政治、法律、経済」となり、「今日の文明」が形成されたのだと述べている。

老人尊敬から文明の成立までをこのように展開した後、具体的に実例を挙げて、「思慮の熟した人で才幹あり、道德の訓練を積んだ人」の価値を明らかにし、「老人を尊敬すると云うことは、天然自然の閥である」としている。

この「天然自然の閥」に準じて、「国家に功勞のあつた人を尊敬する」ということが行われてきたとして、「学閥」、「藩閥」、「階級制度」の成立を吟味している。

## 閥を否定する立場

次に、閥や階級制度を認めない「デモクラチズム」、すなわち「民本主義」と、「ソーシャリズム」、すなわち「社会主義」とを取り上げて説明した後、「総ての人間と云う者は年齢の階級、道德の階級、それから財産の階級、幾つもの階級がある。其の階級というものを無視して、一緒にすることは生物の法則として出来ない」と述べて、「能く研究を願います」と受講者に注意を促している。

## 正義の議論

次に「権利」は、「ライト」や、「ジャスティス」といった言葉が土台となっていて、その「権利も正義も一つである」と述べている。廣池は、この「正義」の観点から、すべての人に「同じ権利を与え」ようとする「民本主義」の「不合理」を説明し、分配的正義の議論を展開している。

廣池は、アメリカの社会学者の E・A・ロス (Edward Alsworth Roth, 1866-1951) の『ソーシャル・コントロール』(Social Control, 1920) に言及して、形式的平等は正義を正しく実現しておらず、正しくは比例的平均<sup>(40)</sup>によって実現すべきことを論じ、アメリカの哲学者・心理学者・教育改革家の J・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の『民本主義と教育』(Democracy and Education, 1916) に言及して、「自由平等」の弊害を指摘し、さらに別の米国の教育学者の『子供の権利』から、「親から良く生んで貰う権利、良く教育して貰う権利、良く養うて貰うと云う権利がある」との主張を引き、批判を加えている。廣池は、「権利」だけでなく「義務」を取り上げて、「権利は義務から起こった」とも、「義務を行うた者に権利と云うものは付いて行く」ものだと述べて、「義務先行説」を展開している。

(3) 「最大の道德は最大の幸福を生む」

講義の流れを概観しておこう。はじめに「最高道德実行の効果」を「最大の道德を行う者が、最大の幸福を受ける」と明示し、天照大神の最高道德の中核である「慈悲寛大自己反省の精神」と、この精神を共有する人々の事蹟について説明している。次に、現代科学の成果を援用して、「慈悲寛大自己反省の生理学的効果」、「不道德心と病氣」を論じている。「道德と平和」では、慈悲寛大自己反省によらなければ真の世界平和は望めないこと、また、宗教については、「本体の同一性」の理解に基づく信仰のあり方と、道德的・犠牲的努力の重要性を説いている。これらの議論を学問的に裏付けるものとして、F・A・ウツズのヨーロッパの王室研究を示し、主権を握るような人は、道德の非常に卓越した者でなければならぬことが明らかにされたとしている。最後に、日本の皇室とイギリスの王室の道德的精神のエッセンスの比較を行っている。

「最大の道德は最大の幸福を生む」

最高道德実行の効果

廣池は「最大の道德を行う者が、最大の幸福を受ける」という道德的命題を示し、日本皇室の永続の原因を問うた上で、従来 of 国体論者の議論を批判し、さらにこの命題に示された道德法則によるならば、「皇室だけでない。吾々国民でも万世一系になる」と、最高道德実行の効果を約束している。

ヨーロッパ、中国、日本の永続家系について具体例を挙げ、永続の原因は、やはり道德実行の結果であると例証していく。

慈悲寛大自己反省の精神

話を日本皇室に戻し、『古事記』の天照大神と素戔嗚尊の神話を述べた後、「天照大神は慈悲寛大の精神で、素戔嗚尊を待遇してもまだ斯う云うことをする。自分の徳が足らぬのだ」と「自己反省を遊ばされて自ら顧た」と、天照大神における最高道德的精神の中核は「慈悲寛大自己反省」であったことを明らかにする。廣池は、「慈悲」を説明して、「善人も悪人も愛する一視同仁を云う」とも、「両方の助かるようにするのが慈悲である」とも述べ、キリストも釈迦もそうであったとして、「悪人も、善人も、両方助ける」と説明している。そして、天照大神のような「徳のあった者」として、「ソクラテス」、「孔子」、「親鸞上人」、「法然上人」、「弘法大師」、「伝教大師」、「中山ミキ子」の名を挙げている。

中山ミキ子に因しては、「庄助と云う雇人が働かない、働かないのは、主婦として徳が足らぬと自己反省した。夫が妾を持つのは、妻として真実が足らぬのだと自己反省して居れば、遂には二人が恥じて別れて了

う。天理教の今日を致したのは慈悲寛大自己反省を行うて遣ったからで、其れを信徒が真似て、それを以って段々殖「え」て来たのであります」と、中山ミキ子の道徳的精神のエッセンスをエピソードにより明らかにした。

廣池は、慈悲寛大自己反省の精神で「労働問題」の解決に取り組んで成功を収めつつあること、「宗教」は慈悲寛大自己反省がもととなってできたこと、また、「善いことをして、人から感謝されて居る者が成功する」実例として、イギリスの銀行家・政治家・ナチュラリスト・考古学者で、ロンドン大学副総長、大英博物館長を務めたジョン・ラボック (John Lubbock, 1834-1913) の事蹟を紹介している。

#### 慈悲寛大自己反省の生理学的効果

話を天照大神に戻し、「天岩戸隠れ」の道徳的意味を、「天照大神の慈悲寛大自己反省、之は自分の徳が足らぬのであると畏んで、是から道徳の修養を致そうと、是から一室にお籠りになった」とし、天照大神の「御容貌が、更に道徳の修養の結果美しくなつて居られた」ということに、注目している。これは「心が本で、此の肉体の容貌骨格が出来運命が出来る」ことだとして、「最近の心理学、生理学並びに医学上の実験」に触れながら、科学的説明を行っている。

#### 不道徳心と病氣

医学の臨床的実験、心理学や生理学の実験で、「総ての不道徳心が、皆病氣の本になる」ことを「続々証明して来て居る」と述べている。この「不道徳心」は、「腹を立てると心配するとに帰着する」として、まず「腹を立てる」ことの生理学的影響をドイツのレイマン (Alfred Lehmann) の生理学的研究を引いて説明し、次に「心配」と消化できなくなることを、猫を使った実験観察で明らかにしている。

ここで、時局の話題に転じ、「成金」批判を行った後、さらに具体例を挙げて、「道徳に依つて出世し、不道徳に依つて皆倒れる」のは、「道徳が足らぬ」のだとしている。

話を本筋に戻し、「容貌骨格」も、「病」も、「心」と関係していることを、「儒教」、「キリスト教」、「神道」、「天理教」に触れながら、「病氣の本は心から」、つまり「道徳心、不道徳心に関係することを確認している。

#### 道徳と平和

次に天照大神の慈悲寛大自己反省から世界「平和」に及び、「いままで人類は武力を以て平和を買おうとして居った。天照大神は自己反省の聖徳を以て、初めて平和が出来た」とし、この「道徳に依つて平和を起こそう」という心が、「世界の人類に分からぬ間は、国際連盟は出来よう筈がない」と、述べている。

#### 本体の同一性

宗教の重要性に触れ、「二十世紀以降の宗教」の説き方を、次のように示している。「宗教と云う中の本体の天理王命、阿弥陀様、大日如来等色々云われて居るけれども、学者から見ると神様も仏様も同じである」と、本体の同一性を押さえた上で、そこに至る道行きの違いとして各宗教をとらえ、日本は、「天照大神が之を拵えて統治あそばされ、それによって今日まで来つて居る」、そして「其の幸福は天照大神の御徳であるから、陛下は天照大神を特別に尊敬する」とし、また「村であれば氏神を尊敬し」、「家族」としては「祖先を崇拜し」、「親に孝行を尽くす」というように、信仰の仕方を説いている。

#### 道徳的努力

話を元に戻し、日本の「国体の渊源」は「天照大神の慈悲寛大自己反省」にあり、「歴代の天皇」が「道

徳を積まれた結果」である、「吾々の理想とする所は、日本国民が皆斯う云う精神になって来「る」こと」とし、「順応同化」「進化発達」の法則に合った努力の仕方を説いている。

「正義」と「犠牲」について、「正義と云うことは権利と云うことと同じく、権利を争い、正義を争う」として、「道徳でなければならぬ。犠牲でなければならぬ」、「道徳さえ知って居れば、一行も法律は知らぬでも直しいが、西洋人は法律が喧しいから、一通り知って居らぬと対等が出来ぬので、法律も研究したのである」と「道徳」「犠牲」でなければならぬと、述べている。そして、法学博士会のメンバーの例を挙げ、「本当に法律の分かった人であつたら道徳家である」と述べ、「県会、市会、町村会」の地方行政の担当者や教育者に対し、威張るのではなく、慈悲寛大自己反省で対処してほしいと訴えている。

#### ウッズの研究

アメリカのウッズ (Frederick Adams Woods) の『メンタル・アンド・モラル・ヘレディティ  
ーヤルティ』(Mental and Moral Heredity in Royalty, 1906) に言及して、書名の意味を説明し、昨年ようやく、「金額の如何を論ぜず」、「五十銭位の本を、八十円掛けて買った」と入手の苦労話を披露している。そして、これにより「日本国体論の証明が殆ど完備したと云って宜しい」と、ウッズの研究を高く評価し、これまで、「遺伝学、社会学、総ての科学」、「天照大神」と「歴代天皇」の研究により証明を試みてきたが、「今度ので以て動かぬ証明が挙って来た」としている。この本では、「欧羅巴の皇室八百何人の皇族」の「知識と道徳と資力」を数値化し、比較をしたところ、「主権を握る」ような人は、「道徳の非常に卓越した者」でなければならないことが明らかになった、と説明している。

#### 皇室の日英比較

最後に、「英吉利の皇室と日本の皇室」を比較し、「英吉利の皇室はどう云う道徳か」と問い、それは「正義の源」で「正義が標準」であり、「日本は慈悲寛大自己反省」で「標準は犠牲」であると述べている。

ここに取り上げられたウッズの研究は、後に『道徳科学の論文』の第三章で「人類階級の先天的原因」の一つとして「遺伝」を論じた中で、「獲得形質も遺伝するという学説」というテーマに関連して「欧州の王族における遺伝の事実」として、第五章で「人類の精神のおよび物質的生活の根本原理」の中で「知徳一体に関する科学的証明」の一つとして、またその他の章においても、取り上げられている。

#### 六 大正八年夏から秋の滞在

大正八年七月十八日に本島に出かけていくときには、本島関係者の河村ツル子と小野松枝の二人が、大阪まで廣池を迎えに来た。このときの本島滞在は、七月十八日から八月十一日の二十五日間と、八月三十日から十月十九日までの五十一日間の、合計七十六日間であった。途中の八月十一日から三十日の間は、廣池は父半六の葬儀を執り行うために、九州に出かけている。

#### 1 モラルサイエンス研究

七月十八日の『日記』には、「本島にて決定の上、支教会と合意の件」として列挙された項目の中に、「モ

ラルサイエンスの大成」という記述がある。モラルサイエンスについては、別の項目でもさらに、「十一月の東京講演。〇本講 世界の新学モラルサイエンスと労働問題の根本原理ならびにその結果。二席に分かつ」、「モラルサイエンスの研究」、「今後の活動／一、モラルサイエンスの研究」<sup>(42)</sup>と、同一日の記事の中に四箇所も登場している。廣池は、本島行きを契機として、モラルサイエンス研究に集中していくのである。

## 2 講習会

講習会は、七月十九日から二十六日まで八日間行われた。<sup>(43)</sup>本島支教会の藤山春之助氏は、「この講習によって、部内教会長は天理教の世界的に偉大なる事実を教えられるとともに、天理教人であることに非常な誇りさえ感ずるようになり、教会長のごとくが非常に活気づいたものである。その結果として、翌九年の九月には、本島から百人の別科生を送ることができたのである」と、<sup>(44)</sup>廣池の講習会の効果について述べている。このときの講演原稿と思われるものが残されている。

### (1) 「みおさ信心と陰徳」

「みおさ信心と陰徳」と仮題が付された原稿がある。そこには、「十九日、御話の題号」として、「みおさ信心」、「陰徳とみおさの別」、「天理教とモラルサイエンス」、「学問と実際」、「陰徳」といった項目が立てられ、各項目について、ポイントが簡潔に箇条書きされている。ただし、「学問と実際」には、ある程度まとまった記述が見られるので、ここでその内容を見ておくことにしたい。

「二」で、「古の学文は、哲学なれば実際と合わず。今の学文は實際を基礎とす。世人も天理人も、此區別

を知らず」と、「今の学文」の特徴を述べた後、「二」で、「實際を基礎」とした廣池自身の学問について、次のように述べている。

予は、(1)書籍上の研究のみならず、(2)御助けの実験上、並びに過去のあらゆる経験による。

○現に昨冬よりの御助の例を見よ。

この後、「学者」と「實際家」の間に存在する大きな溝について述べている。

然るに学者は、實際家を軽んじ、實際家は学者を軽んず。

天理教の教師も亦然り。

独り当会のみならず。

予は学者の上に、天理教の実行を感じ、その理を重んじて、本部並びに部下に奉仕す。

然るに天理教の人人は、只予を学者として、一時的利用に供せんとするのみ。故に徹頭徹尾軽蔑す。予は不徳なる故に、どこ迄も十二分に軽蔑して下さる事を願う。而して学者と実行とを兼ねさしていただきたいと思えます。

廣池は、自分の学問研究の方法の特徴を、文献研究に加えて、実験的、経験的、実践的、実行的としている。このような研究方法で、身も心も捧げて開拓してきたモラルサイエンスであるにもかかわらず、天理教



には、その価値を認識する人がほとんどいなかった。ところが、「独り当会のみならず」とあるように、本島支教会だけは違っていたと述べている。会長の片山好造氏が、モラルサイエンスを高く評価していたことについては、すでに前稿で明らかにしておいた。ここに、「天理教の人人は、只子を学者として、一時的利用に供せんとするのみ。故に徹頭徹尾軽蔑す」とあるが、私は、この記述を読んだとき、人間を道具のように単なる手段としてのみ扱ってはいけないとした、カントの定言命法がすぐに思い出された。廣池はこのような境遇にあつて、どのように対処しようとしたのであろうか。「予は不徳なる故に、どこ迄も十二分に軽蔑して下さる事を願う。而して学者と実行とを兼ねさしていただきたいと思ひます」と、「学者」として学問研究に打ち込むと同時に、「実行」、つまり、最高道德の実行を貫く覚悟を固めたのであつた。

このあと、廣池は、「信仰と道德」と「他の力」を比較し、「信仰及び道德は他の力と異り、力は後のものほど大也。又自慢して徳はへりても力はへらず。然るに信仰と道德とは、初のものほど尊し。故に天照大神以上の人出ずるも、其の人若し予は大神よりえらしと思わば、もはや高慢の不徳にて、信仰家、道德家としては○也。只力はへらず。○予は此理によりて、只はいはいとはい下がる事に決心せり」と述べている<sup>(45)</sup>。筆者は、「只はいはいとはい上がる」という表現はいくつも見たことがあるが、「只はいはいとはい下がる」という表現はこれ以外に見たことがない。徹底して低い心となる覚悟から、このような表現がとられたものと思われる。

## (2) 「世界改造と人間改造」<sup>(46)</sup>

はじめに、「国際戦争」「民族戦争」「階級戦争」というキーワードを提示し、「之を防ぐ為に、古来コスモ

ポリタニズムや、国際法など色々あり」とし、「現代思想」による取り組みとその弊害を概観した後、「将来に於ける世界大戦を治むる方法」は「天理教の方法」でなければならぬとしている。

「天理教の世界改造」という題で、「一、天理教は人間を内部より改造す。之を措きて他に途なき事を説くべし」と述べ、「二、之を証明するものはモラル・サイエンス也」として、モラルサイエンス研究の成果を踏まえた講義が行われている。

例えば、本講演要旨のなかには、「米国、ネブラスカ大学の社会学教授」のE・A・ロス(Edward Alsworth Ross, 1866-1951)の『社会統制論』(Social Control, 1920)、「紐育、スミス・カレッジの社会学経済学教授」のF・S・チャピン(F. Francis) Stuart Chapin, 1888-1974)の『社会進化論』(Introduction to the Study of Social Evolution, 1913)、「紐育大学の教授。哲学、教育、道德、宗教、道德等に通ず」としてH・H・ホーン(Herman Harrel Horne, 1874-1946)の『教育における理想主義』(Idealism in Education, 1916)、「ネジュー・コロンビア大学教授で社会学者、教育家のF・H・ギディングス(Franklin Henry Giddings, 1855-1931)の『社会学原理』(The Principles of Sociology, 1916)といった文献が列挙されているが、これらは後年、『道德科学の論文』に収録され、道德科学基礎論を形成する上で重要な役割を果たすことになる文献である。

廣池は、これらの文献を利用しながら「病の本は心から」「自然的進化の法則」といったテーマを論じ、「生存競争」は「初めは只力のみにて争う」ところから、「次に道德を方便として用う」「る」ようになり、「天理教になりて、道德にて争う」、つまり「慈悲の心にて行う道德」で生存競争に立ち向かう段階に到達した、と述べている。

## 3 体調

本島滞在の前半で体調不良を示唆する『日記』の記事は、七月二十四日の「セキとまる」という一箇所しかない。しかし、前半の滞在期間中の八月八日に、廣池が松村吉太郎幹事に送った書簡によると、春からずっと衰弱状態にあったことがわかる。

小生身上当春以来予想外に衰弱甚だしく、且氣管之損傷亦頗る深く、せきとたんと不遑出で、講演に差支候為、本島にて静養之處多少宜しく候……。〔中略〕本島は氣清く景宜しく、養生には好適地に有之候。一切を棄てて静養仕居候。体重目下十一貫二百目に候。真に御諒察を乞ふ。このまま講演などに奔走致候はばもはや一年も立たざる内に死亡可致候。此の憫むべき身上之衰弱に対して内情を知る人無之、謹で右実情打明けて申上候。<sup>(47)</sup>

「氣管」をいためていて講演に差し支えること、本島で静養していること、現在の体重は「十一貫二百目」、つまり四十二キログラムであること、また、このまま巡回講演を続けていけば、「一年も立たざる内に死亡可致候」と、理解を求めている。

## 4 父半六の死

八月十一日に、父廣池半六の訃報が届いた。享年七十九歳であった。廣池は父半六から、七月二十日に、

「御送り金子つつみ正に受取有難く御礼申上候。……御用心被成度、九州に下る時はしらせて被下<sup>(48)</sup>」という手紙を受け取っていた。廣池は、十月に次のような追記を行っている。

大正八年七月十八日大阪講演終了して、同日朝本島支教会に向て出立せんとす時（本島よりは河村ツル子小野松枝二氏迎ひに来る）、種々の貰ひ物夫々分配進上せし中に、パインアップルの缶詰あり、一見して之を国元（福岡県城野町の寄留地）なる老人に贈呈せんかと思ふ。然るに近く九月には九州へ下り父に面会するが故に、其節は色々土産物を持参する事なれば、今日多忙之中に些かなる物を贈るにも及ぶまじと一旦思ひしも、いやいや先年「明治三十五年父母を東京に招きし事」母の死せし時にも危機一髪の間母を満足させ、以て其死後に喜びし事もありければと思ひ付き、樹欲静風不止 子欲養親不待の古人の教訓の意に従ひ、其時本島より迎ひに来て下されし使ひ人の内一人なる河村ツル子女子に依頼して、更に急に二ヶの缶詰を求め来て貰ひ、前のパイナップル「ル」の缶と合わせて外に小為替の貰ひしもの一枚ありしも同封して、出立がけに小包にて大阪より右の品を祖父の許に送りたり。本紙の前にある手蹟は、即右に対する父の受取状也。而して予は本島に行きて静養中、八月十一日、祖父が去る八日午後発病同夜死去（九日午前）に當る故に九日を命日とす）の訃報到着せり。予の驚きは申すまでもなき事ながら、右の大阪出立の時の祖父への贈り物が、いかに大なる意義を後世に印する事を得しかは、いよいよ此時に思ひ出して感慨無量也。

このように記した後、さらに「仍て後世子孫に此顛末を記して学道の教訓に資す。孝子は必ず出世するもの

也、此一語を忘るる勿れ」と結んでいる。<sup>(49)</sup>

八月十一日に本島で電報を受け取って、すぐに九州に向けて出立し、翌十二日に城野で仏葬を、また、十六日に中津で神葬を執り行った。その後、八月十八日に中津を出発し、十九日から二十六日にかけて、下関と北九州地方で講演を行い、三十日に本島に戻っている。この間、十八日の夜は「中野真吾氏御宅一泊。この夜、金次郎氏、予の研究費を毎月おくることを約す」と研究費の寄贈を受けることとなった。<sup>(50)</sup>

## 5 養生

九州での葬儀を終えて本島に戻ったとき、廣池は、「衰弱甚だし。爾後一週間くらいにて少々回復せしも、熱は毎日少々出する<sup>(51)</sup>」という状態であった。その後、症状はさらに悪化し、十月十四日まで一ヵ月半にも亘って、不調が続いた。

この不調の中、九月五日の諸岡長蔵氏宛ての書簡で、本島における養生の様子を次のように述べている。

小生義、本島支教会長の心配にて、小生身上を利用してはいかん、真に助けた上で使わねば、世上のひながたにならぬという意見にて、こちらで飽きるまで養生するようにとの事、恐れ入り候。当夏より参りおり候次第。<sup>(52)</sup>

片山会長が廣池に、本島で「飽きるまで養生するように」とも、「真に助「かつて、」世上のひながた」になつてほしいとも、語っていたことがわかる。

## 6 治定

廣池は病のなか、八月三十一日に「治定」を行っている。ここでは、「モラルサイエンスの完成と上流の布教をなすこと。布教の結果は講社または教会を設け、自ら統率するも苦しからず。また人にさするも苦しからず。この辺はすべて神様任せのこと<sup>(53)</sup>」という記述に注目したい。

この記事から、大正元年の神に対する誓いが、徐々に具体化してきていることがわかる。「人心救済に関する世界諸聖人の真の教訓に本づくところの前人未踏の真理を書き残しておきましょう」という誓いは、「モラルサイエンスの完成」に、また、「私の学問、名譽及び社会の地位全部を神様に献納し、生きたるままに神前の犠牲となつて人心救済をさして頂き、全人類の安心、幸福及び人類社会永遠の平和の実現に努力さして頂きましょう」という誓いは「上流の布教をなすこと」、そして、「講社または教会を設け、自ら統率するも苦しからず」という表現に具体化してきたのである。上流の布教というのは、これまでほとんど手がつけられてこなかった国家の指導者も開発救済の対象とするということ、<sup>(54)</sup>「全人類」という約束どおり、全方位的に開発救済が展開されていくのである。

## 7 教導職

九月九日の「日記」には、「予、教導職になる。中講義補命」と直筆で記されている。この「補命」に関して、廣池は九月十七日に、片山会長宛てに、「小生も思ふ処有之本月四日教導職補命本部に御願致候処、去九日付にて中講義に補命相成候、教正にする筈之処規則にて其意を得ず、来春昇進致すとの旨松村幹事よ

りことわり申参り候、御含込に一寸申進置候<sup>(55)</sup>という書簡を送った。

また、『斯道』には、「廣池博士は去る八月中、自から進んで本部に出願し、中講義の教職を受けられたるが、博士は語らるやう「私は教職があつてもなくても、教祖の御足跡を踏ませて頂くと云ふ事に変わりはないが、教職がないために、教会制度に反対して居るやうに思つて居る人がある。之れを心外に思ふ処から、今回から進んで教職を拜命したのである」云々。因みに本部に於ては直ちに教正に補命する考えなりしも、教規の定むる処により管長以下如何なる人と雖ども、最初より教正に補命する能はざるを以て、先づ中講義に補せられたるものなるも、遠からず教正に昇叙せしむべき意向なりと云ふ<sup>(57)</sup>という記事が掲載された。

大正八年の天理教における教導職名と人数に関するデータがある。教導職は上から、大教正（一人）、権大教正（一人）、中教正（六名）、権中教正（二名）、少教正（三五名）、権少教正（六六名）、大講義（六三名）、権大講義（二三〇名）、中講義（二五四名）、権中講義（六〇〇名）、少講義（一三五一名）、権少講義（三三四三名）、訓導（九八〇七名）、権訓導（六三三二名）、合計で二万二〇二一名であった<sup>(58)</sup>。

廣池は、このとき中講義となり、大正十四年に権大講義、同十五年に大講義に任命されたが、昭和四年に、本部直属の神恵講を返納し、教導職も辞職している。

## 8 二つの決定

廣池は、十月十八日に、本島滞在を終えて天理教本部に戻り、十一月七日に上京するまでの二十日間、本部に滞在した。廣池は、この間に二つ、重要な決定を行っている。

### (1) 本部手当ての辞退

第一の決定は、本部手当ての辞退である。これについては、『日記』に、「一、今回いよいよ多年の宿望たる本部手当ての辞退を決心す。但し、或いはこのまま頂いて後日献金するも可なれど、目下のところ、分からねぬものの中傷うるさしと感じて右決心す。しかしながら、それは頂いておいて、此れを献納さしていただく形式を取る。その金は、半分は御本部へ、四半分は本部員へ、四半分は准員と青年とへ御配分願ひ上げ候こと。／大正八年十月二十八日夜、定む。／一、右献金は小生健康回復の上、いよいよ助け一条に従事致すようになりし月より実行す<sup>(59)</sup>」と記されている。

廣池は、この決心を片山会長に相談した。片山会長は、理を切つてはいけなさと説得し、また、本部を分裂させてはいけなとも説いた。

右の話を片山会長に相談せしに「それは考えがちがう。神様が必要ありて先生を本部に引きよせしに、これを批難などする人が理の分からぬ人なり。理の分からぬ人々のいうことに心を動かして、先管長公の定めて下されし報酬を謝絶するは宜しからず。かくては、先生は社会から今日の十倍の報酬も得らるることにならうが、本部ではちよつと先生を従来のように心易く使うことが出来ぬようになり、自然に理が切るようになるべし。そこでこの金額はたと少量にしても、神様からの御恵みとして受けておいて、さて御道の上で今後働いて得たものを万倍にして本部に尽くすということにしてはいかがや」云々といわる。

右、片山会長の言は一句一句みな金玉なり。予も多年かく思い込みしも、今回はこれが真の誠に相違な

きゆえに右決心せしは、甚だ神様や管長公に相すまずと懺悔して、片山会長の言に即時に従うことに決心す。

右に付き、本部長、准員、青年一同へ菓子料を包みて、御恩報じの実を表す。<sup>(60)</sup>

本島会長いわく、しばらく御待ち下さい、天理教は世界を平和統一にするために生まる、然るにその根本の本部が分裂してはどうしますか。私は一方、先生(予)のタンノウにより、一方他に説いて、本統を一手一つにせん心組みなりと。予も、この心ありしもついに行われずと見て、一人を潔くし時節を待たんとせしも、会長の言により、予も再び飽くまで本部に調和して、一手一つの実を現わんことに努力する決心を堅む。

よって本日改めて本部長、准員の宅に挨拶品を贈呈す。<sup>(61)</sup>

当時、廣池が「本部手当て」を受け取っていることを「中傷」したり、「批難」する人たちがいたのである。先には、「天理教の人人は、只予を学者として、一時的利用に供せんとするのみ。故に徹頭徹尾軽蔑す」という表現もあったし、さらに、「予に対する某一派の排斥」といった言葉もある。このような状況の中で、廣池がとった方針は、「飽くまで本部に調和」というものであった。

## (2) 地方講演活動の中止

第二の決定は、松村吉太郎幹事から地方講演をやめて、天理教教理研究に専念するよう依頼されたことに

より、大正元年に始まり、同五年以降国民道徳講演会の講師として地方巡教を行ってきた活動を中止することにしたことである。廣池はこの決定を、十一月二日に、手紙で片山会長に伝えている。

小生之身上事情に付、今回改めて本部奥様ならびに山沢先生に御話し申し上げ候処、何れも心静かに静養の上、御道の御用頼入との御事に有之候処、本日又、松村幹事殿、拙寓を御訪ね被下て、今日の時機真に千載一遇にて、今後小生の進退は実に御道の上に重要なものと相存候間、大に自重して教理の根本義の研究と養生とのみにかかり、地方講演その他些細の事には一切関係せぬよう致し候様にと、くれぐれ御話し致し下され、多大の好情を表してかえられ申候。<sup>(62)</sup>

ここに「地方講演その他」と関係することなく、「教理の根本義の研究と養生とのみ」にかかってよいとの許可を得て、廣池は、翌大正九年から、本島で静養と研究に専念することとなった。ここにいう「教理の根本義の研究」には、教理研究そのものと、教理を現代諸学問の成果を援用して研究するモラルサイエンスが含まれていることを、忘れてはならない。

この手紙の最後に、「これ偏に当夏以来貴下を始め貴会重役諸君の御厚情にて小生の決意神慮に叶い候より、益々かかる好結果に向かい、将来御道大発展の基ここに確立致候ものと深く貴下ならびに各位の御道に対し小生に対する御芳志を感謝仕候」と記していることから、廣池が「教理の根本義の研究」こそ「御道大発展の基」と確信していたことが確認できる。

注

- (35) 「廣池千九郎日記2」(以下、「日記2」と略す) 一六七ページ。
- (36) 道徳科学研究所研究部編「研究ノート12 廣池博士資料調査報告集I 昭和三十三年四月-昭和三十八年三月」(以下、「研究ノート12」と略す) 二八五ページ。
- (37) 「」内部の「」の記号は、遺稿整理の段階で編集者が付したものである。
- (38) 「日記2」一六八-一九ページ。
- (39) 「日記2」一七七ページ。
- (40) 廣池は、ここで「比例的平均」という言葉を使っているが、内容的には比例的平均の議論を行っている。比例的平均は、昭和八年十一月に起稿し、昭和九年一月に脱稿した、『論文』の「訂正増補 第二版の自序文」に明記されており、「各個人もしくは各団体の実力もしくはウェアー・チューすなわち徳の質と量とに比例して権利もしくは利益を賦与することをいうのである」と割注で説明が加えられている(『論文1』序三三ページ)。
- (41) 現代の遺伝学においては、一代獲得性遺伝は否定されている。一代獲得形質の遺伝が否定されるのは、一九五三年にジェームズ・ワトソンとフランシス・クリックによりDNAの二重らせん構造が発見された後のことである。ウヅの先の著作が出版されたのは一九〇六年であるから、DNA二重らせん構造の発見の四十七年前であり、今回の廣池の講演は大正八年(一九一九年)で三十四年前、また、『論文』が出版されたのが昭和三年(一九二八年)で二十五年前のことである。
- (42) 「日記2」二〇二-二〇四ページ。
- (43) 「日記2」二〇五ページ。
- (44) 『本島乃道』四二-三三ページ。
- (45) 「遺稿」。
- (46) 「遺稿」。
- (47) 「遺稿」。カタカナをひらがなに改め、二箇所旧字を新字にあらためた。
- (48) 「遺稿」。カタカナをひらがなに改めた。
- (49) 「遺稿」。カタカナをひらがなに改めた。
- (50) 「日記2」二〇六-一八ページ。
- (51) 「日記2」二〇八ページ。
- (52) 「遺稿」、書簡、廣池千九郎↓諸岡長蔵、大正八年九月五日。
- (53) 「日記2」二〇九ページ。
- (54) 廣池は、今回の本島滞在の後、天理教本部を経て帰京し、十一月十四日には日本海員救済会常議委員会に出席、同月二十三日にはモラルサイエンスについて華族会館で講演(大木遠吉伯爵主催)、同月二十九日には博士会に出席、十二月十九日には幸俱樂部で講演、同月二十一日には浪沢

- 栄一を訪問、同月二十二日には岡部長識子爵を訪問、同月二十六日には船越光之丞男爵を訪問、大正九年一月十七-十八日の二日間は山県有朋公爵にモラルサイエンスの講義をするなど、立て続けに上流開発を実施している。(『日記2』二一九-二二ページ)
- (55) 「遺稿」。
- (56) この教導職補命願いに関して、高野友治氏は、廣池が片山会長に「お諭し」を願ったとき、片山会長が次のように論じたというエピソードを伝えている。「貴方は天理教の先生として天理教の教理を各地で説いておられる。天理教には天理教の教規といふものがある。その教規によれば、天理教の教師は教会本部から教師の補命を受け、然る上に教理を説くことになってゐる。教師の補命を受けないで教理を説くことも或は出来るかも知れん。然しそれは道に順応同化する所以ではない。教師の補命を受けて、然る後に道を説くべきであらうと私は思ふ」(高野友治「伝道者」二二-三四ページ)と、このように論じられた廣池は、

- 直ちに補命の手続きをとったとある。
- (57) 「廣池博士教職となる」『斯道』第六三号、大正八年十二月号、五七ページ。
- (58) モラロジー研究所編「廣池千九郎日記 用語解説」廣池学園出版部、一九九四年、一四三-三三ページ。
- (59) 「日記2」二二六ページ。
- (60) 「日記2」二二六-七ページ。
- (61) 「日記2」二二五ページ。この引用文中にある「一手指」とは、「幾人かの人をばらばらの心や別々の行動をとるのでなく、真底ひとつ心になること。また一つの行動をとること」(天理大学おやさと研究所編『天理教大事典』天理教道友社、一九七七年、五三-三三ページ)とある。
- (62) 「遺稿」。
- (63) 「遺稿」、書簡、廣池千九郎↓片山好造、大正八年十一月二日。

\*本稿の草稿に目を通していただき、貴重なコメントをいただきました。麗澤大学外国語学部教授・学長補佐、モラロジー研究所の廣池千九郎記念館副館長・道徳科学研究センター廣池千九郎研究室室長である、井出元教授に感謝いたします。